

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

映像作品「しょうでんさま」公開事業

2020年2月2日、埼玉県川口市の彩の国ビジュアルプラザで、熊谷市妻沼の国宝「歓喜院聖天堂」の映像作品「しょうでんさま 国宝 歓喜院聖天堂」の完成上映会が開催され、約300人が参加しました。

この作品は埼玉県と株式会社デジタルSKIPステーションが実施している映像コンテンツ事業として、昨年9月から12月まで聖天堂や地域の史跡などを撮影。委託先の株式会社ソニーPCLが制作し、1月に完成したものです。作品は約40分の内容で極彩色彫刻が数多く紹介されているほか、2012年に国宝指定された聖天堂の特色、約7年を要した「平成の大修理」などを解説しています。ドローンを使用し国宝建造物を上空から撮影した動画や、高所クレーンを使用し彫刻に近接した位置からの撮影など多種多様な内容となっています。

完成上映会では、映像公開の後、国宝指定に向けての調査研究に関わった熊谷市教育委員会担当者が「歓喜院聖天堂の美と信仰」と題して講演し（右上写真）、聖天堂の彩色復元を担当した株式会社小西美術工芸社のデービッド・アトキンソン社長と文化遺産の保護と公開活用をテーマに対談しました（右下写真）。文化財の枠を超えた経済やビジネス、国の成長戦略や地方創生にまで話題が及び大変有意義な情報発信となりました。

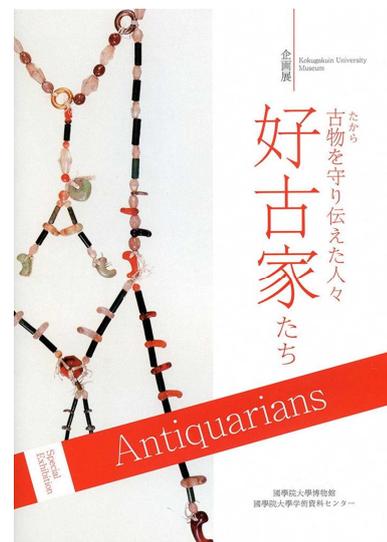
これに加えて、2月22日、熊谷市商工会館大ホールにおいて、熊谷における映像作品完成を記念してのフォーラムが開催され、約70名が参加しました。野原晃教育長の主催者挨拶、映像監督：稲葉正広（株式会社SONY PCL ポストプロダクションコーディネーター）の趣旨説明を冒頭に、映像作品が熊谷で初公開されました。鑑賞後、講演「妻沼聖天山本殿『歓喜院聖天堂』の技と美—国宝指定への道—」、トークセッション「妻沼聖天山の文化遺産の保存と記録化」と題して、妻沼聖天山歓喜院・鈴木英全 院主と稲葉監督によるトークセッションが行われました。なお、完成作品は彩の国ビジュアルプラザ（川口市）で公開される予定です。（山下）



國學院大學博物館

企画展「古物(たから)を守り伝えた人々—好古家たち—」

江戸時代中頃から明治時代に古器物に関心を持つ「好古家」と呼ばれる人々が各地に現れています。彼らは出土品や伝来の器物・古文書等を蒐集し考察するなどの文化活動を行い、蒐集品の多くは貴重な文化財として後世に伝えられています。今春、國學院大學で開催された企画展では、好古家の一人として本市青山出身で、好古家の典型とされる「根岸武香」が紹介されました。武香は吉見百穴の発掘を行い、本市上中条地内発見の埴輪や平安時代から戦国時代までの古文書などを蒐集保存しました。武香の没後、資料の大半は国立博物館と国会図書館に寄贈され公開されています。本展は武香の文化財保護への功績と好古家たちとの交流も知ることができる展示でした。（新井）

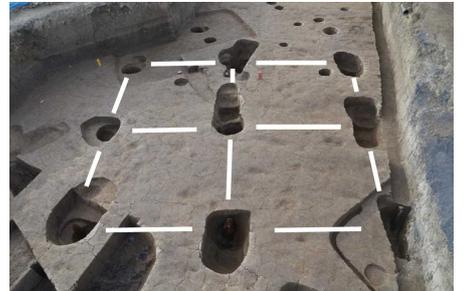


市内遺跡発掘情報

前中西遺跡発掘調査について

今年度の上之地区の発掘調査は、計5地点を通年で断続的に実施しました。今回紹介する第2次調査では、弥生時代中期後半、古墳時代前期、奈良・平安時代の集落が確認されました。特に、古墳時代前期の集落では火事により焼失した竪穴建物跡（右上写真）が確認され、ここは全長20mを超える前方後方形周溝墓が確認された場所から約250mの近接地であり、共通する遺物が出土していることから、この周溝墓の被葬者に関連する集落と考えられる発見でした。また、奈良・平安時代では、2×2間の総柱形式の頑丈な造りの倉庫が確認され、4つの柱穴には柱の基部が遺存して出土しました（右下写真）。この建物は、当時の律令制に関わるものかもしれません。

そのほかの調査としては、第1次調査は前号のとおりですが、第3次調査は弥生時代中期後半以降の墓域、第4次調査は古墳時代前期から奈良時代までの集落、第5次調査は弥生時代中期後半以降の集落と墓域を確認するなど、大きな成果がありました。（蔵持）



池上遺跡発掘調査について

平成30年度から引き続き、市内池上地区のほ場整備事業の一環として池上遺跡の発掘調査を実施していますが、今年度の調査では、奈良・平安時代を中心に弥生時代～奈良・平安時代に帰属する遺構・遺物が確認されました。

遺構は、溝跡を中心に掘立柱建物跡、方形周溝墓、河川跡、土坑などが確認されています。特に方形周溝墓、河川跡や掘立柱建物跡については、国道17号バイパスの発掘調査（小敷田遺跡）成果との関連において注視されるものと考えられます。中でも、方形周溝墓（右上写真）については、これまで小敷田遺跡の方形周溝墓は関東最古級とされてきましたが、今回のものはこれよりさらに古く、弥生時代中期中葉の東日本最古級のものと考えられます。

また、河川跡からは奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀前半）の土器が大量に出土し、そのうち数点の須恵器坏の底部（右下写真）には「官」または「宮」、「口刀自」、「豊」と墨書された土器が確認され、近隣に官衙（役所）的施設の存在が想起されます。さらに、この河川跡に隣接して湧泉の痕跡が確認できる方形の土坑からは、墨書土器、滑石製臼玉、桃の種子などが出土し、これらは湧泉祭祀に関わるものと考えられます。（腰塚）



連載 くまがやの古墳群

⑳ 乙鵜森古墳群 — 工場建設とほ場整備により発見された古墳 —

乙鵜森古墳群は、妻沼地域西城（にしじょう）の福川右岸、妻沼低地の自然堤防上に所在する古墳時代後期に造られたと推定される古墳群です。

乙鵜森地区における調査では古墳1基が発見されましたが、かつては墳丘が残る古墳2基の存在が知られていました。調査された古墳は、墳丘径16.5mの円墳で、周溝のみ確認され円筒埴輪が多量に出土しています。

また、東に隣接する長安寺地区における調査では、古墳が1基発見されています。古墳は、周溝の一部が確認され、径約20mの円墳と推定されます。周溝からは埴輪の小破片が集中して出土しています。なお、この古墳の北方25m付近では、円筒埴輪等が集中して廃棄された箇所が確認され、これは周辺に古墳群が存在していた傍証と考えられます。

本古墳群は、東西に約400mの広がりを持ち、かつて多くの古墳が存在していたと考えられますが、河川の氾濫等による消滅が主な原因で、他の多くの古墳の存在は不明の状況です。（吉野）



右上写真：長安寺地区で発見された古墳（周溝の一部）
右下写真：長安寺地区・埴輪集中出土箇所の円筒埴輪

◇「トンボ玉づくり」体験

今年度から古代体験事業に「トンボ玉づくり」が加わりました。トンボ玉は古代の装飾品の一つで、ガラスでできています。その歴史は古く、弥生時代の遺跡からも出土しています。当センターでは、外部講師をお招きして、夏休みに小学生向けを、11月から2月にかけて毎月1回大人向けの講座を開講しました。ガラス玉の制作は、まずガラス棒をバーナーで溶かしてステンレス棒に巻き付け、炙りながら形を整えて模様をつけ、灰の中で冷ましたら完成です。水飴のように柔らかいガラスの扱いに苦戦しながらも、できあがった作品の美しさに、皆さん大満足の様子でした。(星)



◇社寺建造物保存の研修会開催

2020年2月13日・14日、妻沼聖天山を会場に、一般社団法人社寺建造物保存技術協会主催、熊谷市教育委員会協力の研修会が開催されました。これは、実務経験10年以上で国内の文化財保存修理事業を担当する技術者を対象に行われ、15名が参加しました。国宝「歓喜院聖天堂」保存修理事業及び国内の彩色修理を主題として、「平成の大修理」の保存修理の際に使用された「剥落止め」技法などの特殊技術が研修の主な内容となりました。

具体的には、公益財団法人文化財建造物保存技術協会の内海勝博氏、選定保存技術「建造物彩色」保持者の馬場良治氏による講座、実技演習として当時の彩色責任者であった株式会社小西美術工藝社の横田敏行氏の彩色保存に関する解説がありました。同協会の代表理事で川面美術研究所の荒木かおり氏が参加し各場面で助言を行ったほか、研修にはNHKがドキュメンタリー番組「プロフェッショナル」の撮影で参加するなど、各分野からも関心を集める情報共有の場になりました。熊谷の国宝文化財をテーマにその保存修理事業が国内各地でも活用できる可能性を改めて考える機会となりました。(山下)



◇「村岡の渡し船」実測調査

熊谷市立吉岡小学校に保管庫がある市指定有形民俗文化財「村岡の渡し船」の実測調査を実施しました。村岡の渡し船は、江戸時代から明治時代にかけて、熊谷宿と村岡村(現熊谷市)を結んだ渡し場の船です。明治42年(1909)に荒川大橋が完成したため、渡船は廃止されましたが、吉岡小学校の保管庫に馬船(馬を運ぶ船)の1艘と、歩行船(人を運ぶ船)の2艘が保管され、荒川の交通の歴史を知る上で重要な資料となっています。(山下)



【文化財探訪 わが街熊谷遺跡巡り 中条中島遺跡】

現在、江南文化財センターでは、中条中島遺跡の製鉄遺構をテーマとした、出土遺物の展示・公開を行っています。

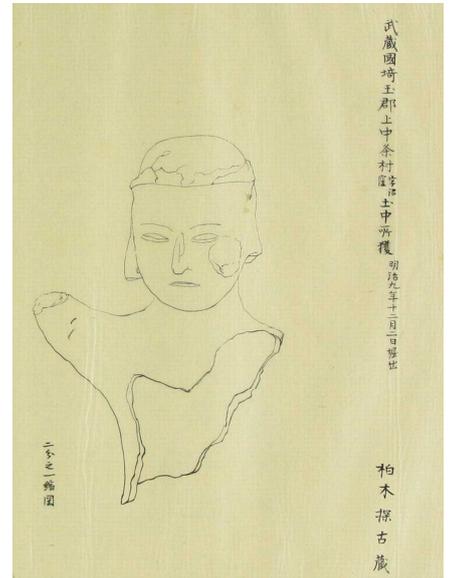
2017年4月・5月の発掘調査により、竪穴住居跡5軒と大量の遺物が出土しました。土器は、古墳時代前期に相当する「五領式」とされる土器形式です。主に東海地方西部(三河地方)に出土する「S字口縁台付甕」や、東海地方東部(沼津地方)に出土する大型の「二重口縁壺」、近畿地方に多く出土する「小型器台」などの各地の影響を受けた土器があり、古墳時代前期(3世紀後半～4世紀末)の活発な地域間交流を反映しています。また、竪穴遺構からは鉄器生産を示す炉跡、送風管に使われた羽口破片鉄滓、砥石などの遺構・遺物が揃って出土したことが注目されます。古墳時代前期の鉄器製作遺構は、成沢の行人塚遺跡に次いで市内では2例目の発見です。妻沼低地の開発が本格的に始まったと考えられるこの時期の集落は、中条古墳群出現の基となり、後の「さきたま王権」(さきたま古墳群)の成立基盤を造った先進的な集落の一つと考えられます。今回、整理途上ですが土器や鉄器製造に関する資料の主なものを展示しています。(新井)



文化財コラム 中条古墳群の人物埴輪再発見

明治時代初頭に市内中条古墳群から出土した「短甲武人」や「飾馬」の埴輪は、日本を代表する埴輪として様々な機会に紹介され、教科書や切手に使われています。これらの埴輪に注目した人は上中条の中村孫兵衛と青山の根岸武香で、後に彼らの元から東京国立博物館の所蔵となります。出土地であった中条古墳群での発見埴輪数は先の2体を含め十数体ともいわれるものの実数は不明です。前回のわが街遺跡巡り展では中条古墳群出土の人物埴輪の再発見を紹介しました。これは若い巫女の頭部で所蔵者梅澤氏のご厚意によりしばらくの間、当センターに展示をしています。今後も、新たな埴輪発見の機会は、保存されてきた個人所蔵品にあるのかもしれませんが。

今回紹介する資料は早稲田大学図書館の所蔵するスケッチ画ですが、本図を早稲田図(写真1)と呼びますが、同一埴輪を描いたと思われる図が根岸武香の資料綴(土器諸図-写真2-国会図書館所蔵青山文庫)にあります。また、同一の埴輪と思われる写真が、F・シーボルト『Japanese Archaeology』(1906)に掲載されています。両図の差異は描かれた角度だけではなく早稲田図には埴輪の出土地・出土日時と署名からなる註記があります(別記)。別記にある柏木探古は本名柏木貨一郎といい大工棟梁で、根岸武香とは好古の友人で埴輪を譲られたものと思われる。また、早稲田図により上中条出土埴輪を追加確認できました。但し、埴輪本体は未確認なので、どこかでこの図と同じ埴輪(みずらを有し鉢巻か帽子を付けた男子-馬子か)が再発見されることを期待します。(新井)



【左写真：「青山文庫」土器諸図に掲載 右写真：埴輪図(早稲田大学図書館蔵)】

※早稲田図の註記「武蔵国埼玉郡上中条村字沼窪土中所獲 明治9年12月2日掘出 柏木探古蔵」

【マニアックな文化財メモ】

文化財解説板の設置にフランス人研修生が参加

熊谷市内の企業で研修しているフランス人のオスカー・ラヴィさんが、熊谷市指定文化財の解説板の設置作業を体験しました。ラヴィさんはフランス東部のアヌシー出身で、プロのフォトグラファーとして活動しています。フランス政府のワーキングホリデーを利用し来日し、今年1月から約1年間の研修を行っています。日本の歴史や文化財に興味があるラヴィさんの要望で、今回の業務に関わることになりました。作業では梅岩院にある有形民俗文化財「石像十三仏」や天然記念物「くろがねもち」、名勝「長島記念館・邸宅」の市内3カ所に解説板を設置しました。ラヴィさんは解説板の原案に基づきレイアウトなども担当し、現場作業では支柱の掘削やコンクリートの注入に汗を流しました。(山下)



編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大防止により国内における多くの博物館・美術館が閉館し、企画展などの展示会の多くが中止を余儀なくされています。そうした状況の中で、芸術や文化に触れる機会も減少しています。一方で、熊谷デジタルミュージアムでは在宅でのパソコンやスマートフォンを通じて、文化財や歴史を含む様々な内容を楽しむことができます。事態の終息を願いながら、文化財を紹介する多様な情報や、絵画や伝統芸能などの動画は、私たちの心の癒しとなる効果があると考えられます。積極的にご利用いただけたら幸いです。(山下)



発行：令和2年3月25日(2020/3/25)

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中